駒田信二

島

駒田信二

島

島

1971年5月14日　第1刷発行

著者／駒田信二

発行者／竹之内静雄

発行所／筑摩書房

／東京都千代田区神田小川町2—8

／TEL 東京291—7651　振替東京4123

印刷／大永舎　製本／和田製本

装幀者／中島かほる

定価／700円

©1971　駒田信二

(分類) 0093 (製品) 80065 (出版社) 4604

もくじ

島……5
慈悲……193
狐の子……219
あとがき……252

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

島

1

隠岐ノ島の西北八十五浬、鬱陵島の東南五十五浬の絶海に、大小数十の岩礁に囲まれて東西に並ぶ二つの島がある。

西の島は周囲約一粁半。いくつもの尖塔を持った古城のような構えで、海抜百六十米の虚空にその最高の尖塔を聳え立たせている。東の島は、周囲約一粁、標高百三十米。西の島よりも小さく、また西の島とはちがって際立った峰もない殆ど平頂な島である。

二つの島の並んだ形は、西の島を城とすれば東の島はその砦、西の島を男島と見れば東の島は女島というにふさわしい。

しかし、その女島にしても、荒々しい裸島で、その粗い岩肌には殆ど一本の草も木もなく、断崖絶壁をめぐらして一切のものを拒みつづけているかのような厳しい姿である。だが近よってみると、波濤が休みなく嚙み崩していった岸の浸蝕部にはいくつもの洞窟が穿たれており、また、二つの島の向いあっている側のそれぞれの岸には、ところどころに、崩れた断崖の裾が浜の形をあらわしている部分もある。しかしそれも、ただ累々と岩石が横たわりながら海につづいているだけの石浜で、そのどこにも、どんな狭い砂地もない。厳しい構えの中のこのような崩れは、この島の荒涼とした廃墟のような眺めを一層深めていた。

二つの島の距離は約七十米。そのあいだを、いくつもの岩礁が飛石のように点綴している。このことは、この水道の底がさほど深くないこと、従って二つの島がすぐその水道の下で繋がれていることを示している。つまり、周辺の数十の岩礁をもふくめてこれらの島嶼全体が、海の中では一つなのだ。その海の中での形は、想像もつかぬほどの大きな一つの山なのである。

西の島の尖塔のような峰々の基部は彎曲してU字型を描き、その内側に、掌を立てたような絶壁を穿っているが、このU字の、口径五十米あまりの峻しい坑、また東の島の低い峰々にかこまれた鞍部の陰の、やはり同じようなU字型の、そのまま海に突き入っている深い坑、——それらは昔、この山を噴き出した火口の跡であろうが、海がこの山を沈めていくまでの長いあいだ、いま見るこの二つの小さい島は、すさまじい爆発をつづけ、すさまじい熔岩を流しつづける火山の、高い頂上だったのだろうか。

いまはただ荒涼とした廃墟のような小島だが、想像もつかぬ遠い昔にその巨体を海の中に沈めてから、さらにまた幾千年幾万年がこの島の上に過ぎていったことか。

創生の昔は窺うべくもないが、しかし、一望ただ茫洋と拡がる荒海を、遙かに水平線が弧を描きながら切り取っているその真中の、この廃墟のような小島は、太古の虚無にはじまる無限の時空を思わせることによって、人の心を、自らの有限の空しさへ引きこんでしまうような妖しさを持っていた。

2

昔、この島は、隠岐ノ島の漁師たちのあいだで「魔の島」と呼び伝えられていた。

逞しい海の男たちでも、時には幻におびえることもあろう。だが、魔の島という名は、そういうことからおこった名ではなかった。絶海の真中で、強風に晒され激浪に洗われつづけているその島は、周辺に数知れぬ岩礁を隠していて、もし迂闊に近づくならば船は忽ち砕かれてしまうのである。そういうおそれからの名でも、なかった。

漁師たちは、彼らの現実の眼で、この島に魔物の棲んでいるのを見たのである。その無気味な呻き声は、風の音、波の音を突き破って、その島の遙かな沖合にまできこえてくるのだった。

隠岐の島後の都万浦の漁船が、その話を伝えた。

突風に流されて行ったその船は、隠岐ノ島からおよそ五十里ほどの北にあたろうか、思いがけぬところに、二つの島があるのを見た。あれが竹島という島だろうか。だが、竹島はもっと朝鮮に近いはずである。そんなに遠くまで流れて来たはずはなかった。それに、噂に聞く竹島とはちがって、その島は、竹も木も生えていない小さな裸島のようだった。しかし、もしそれだけのことだったなら、漁師たちも殊更に近よってみようとはしなかったであろう。彼らをその島へ近づけたのは、もう六月も半ばを過ぎたというのに島の岩肌が雪でも被っているかのように真白に見えたこと、それに、もうだいぶん前から耳についていた何とも知れぬ呻き声のような無気味な声が、次第にはっきりときこえてきて、それがどうやらその島からおこっているように思われたからだった。

近づくにつれて、怪しい声は益々はっきりときこえてきた。それは多くの人間の絶叫する声のようでもあり、野獣の群の咆哮する声のようでもあった。次第に岩礁が多くなってくる。その岩礁に船を叩きつけようとするかのように、厚く重たい海藻の波が飛沫をあげて舷側に打ちつける。

その激しい力に逆らって、岩礁を避けながらなおも近づいて行ったとき、漁師たちは、舷側を一間とは離れぬまのあたりに、水面を厚く覆って揺れる海藻をおしわけて、ぬっと頭を突き出した怪物を見たのだった。

皆、ぎょっとして息をつめたことだけは覚えている。だが、それが一瞬のことだったか、或いはそのあいだに長い時間が過ぎたのか、誰も皆わからないという。風の音も波の音も、あの怪しい唸り声も、そのあいだは、きこえなかった。再びその無気味な声がきこえだして、寒気立つ恐怖が身体中に湧き上ってきたときには、怪物の姿はもう消えていた。だが、それが、坊主頭の、ずんべらぼうの、そして腐れかかった死人のような、大きな顔だったことは、皆の眼に焼きついていた。海坊主というやつだろうか。もう船を進めようという者は一人もいなかった。必死に船を戻しながら、しばらくたってから恐る恐る島の方をふりかえって見ると、何と、海坊主はあちらの岩の上、こちらの岩の上で、或るやつは両腕を突張って上半身をもたげながら、また或るやつは肱をついて身を横たえたまま、じっと船を睨みつけているではないか。赤銅色に日焼けしたその胴体は牛よりも遙かに太く、しかもその胴の長さは十尺にあまるだろう。立ち上ればおそらく二丈を超えるにちがいない。もしあんなやつに一撃をくらったならば、人も船も一溜りもないだろうと思うと、いよいよ怖気づいて、もう、あとをも見ずに夢中で船を漕ぎ返したという。

それは、いまから三百数十年前、寛永年間の話である。

3

三百年。この島の上に過ぎて行った長い長い時間の中にあって、それは空しいほどの短い時間

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

であろう。

島は、人間の歴史の始るよりも遙かに古くから、そこにあったのだ。長い長い時間が過ぎ、遠く水平線の向うでこの島を囲んでいる陸地の上に、やがて人間の活動が始ってからも、なお長いあいだ、島は無名の島として、そこにあったのだ。

しかし、ときたま翼を休めていく渡り鳥は別として、海猫がこの島に飛んで来るようになったとき、既に、島は人間とのつながりを持ち始めていたのだった。遠い陸地の岸から、人間たちのために次第に繁殖の場所を奪われていった海猫は、安全な産卵地を捜しまわってこの島を見つけた。いくらか波風の荒いほかは、ここは、かつての沿岸の島々のように自由な安全な場所だった。ここで生れた子供たちは、やがて親たちにつれられて方々の島や浜へ巣立って行った。そして一年たつと、また舞い戻って来てこの島で子を生んだ。こうして島は、年々、海猫たちの賑やかな楽しい古里になっていったのである。産卵期になると海猫の群はこの島の粗い岩肌を覆いつくした。——やがて人間の欲望がこの島の上にまでも及んで来るまでは。

同じようにしてこの島は、海驢にとっても絶好の繁殖地になった。

それぞれ十数頭の牝を引きつれた牡の海驢たちは、近海のどこにも安全な島がなくなって、大洋の真中へと泳ぎ出して行った。牝たちは皆、臨月の身だ。彼女らが子を生み育てるための安全な場所を、早く捜し出さねばならなかった。そのとき、この島が見えた。夫の海驢は、十数頭の妻たちを海の中に待たせておいて、先ず、ひとりで島を偵察してみる。幸いここには恐ろしいやつらはいないようだった。しかも、恰好な洞窟もあり、石浜もあり、岸や岩礁の周りには食糧も充分にある。夫たちはそれぞれの縄張りを決めてから、自分たちの妻を呼びよせる。

妻たちは分娩を始める。それからの夫は、妻たちが哺乳を終るまでの二ヵ月間、一食もせず、一睡もせずに活動しつづける。外敵から、また仲間の男たちから、自分の縄張りと自分の妻子たちとを守るためには、食事をしたり睡眠をとったりする暇は一瞬もないのだ。妻たちは夫の庇護のもとで、赤ん坊に乳を飲ませては海へ飛びこみ、這い上ってはまた乳を飲ませる。海には食糧が豊富である。さば・あじ・いわし・たこ・いか……。妻たちがそれらを貪り食うのを見守りながら、夫は一食もしない。赤ん坊はすくすくと育つ。やがて母親たちはわが子に泳ぎを教え始める。恐がる子供を岩の上から突き落しては援い上げ、また突き落したりしているうちに、子供たちは次第に泳ぎがうまくなり、餌の取りかたも覚えてくる。

そのときはじめて、夫はその家族たちといっしょに海へはいり、二ヵ月間の空腹を存分に満たしながら、且つ、つぎつぎに妻たちをつかまえて交接をし、孕らせていく。

二ヵ月間の、そのような苦しい、しかし満足な務めを果し得た夫たちは、それぞれの家族を引きつれてまた游泳の旅に出かける。孕った妻たちが臨月になるまでの、十一ヵ月あまりの長い旅である。来年もまたこの島に来よう、ここは安全な、すばらしい場所だ。

こうしてこの島は、海驢たちにとってもまた、年々、楽しい古里になっていった。繁殖期になると海驢たちは群をなして集って来て、この島の磯と周辺の海を殆ど埋めつくした。——やがて人間の欲望がこの島の上にまでも及んで来るまでは。

隠岐の都万浦の漁師たちが見た白い岩肌というのは、海猫の糞の堆積だったのであろう。そして、巨大な怪物というのは、おそらくは牡の海驢だったにちがいない。牡は体長三米に達するものもめずらしくはない。漁師たちが見たという坊主頭の死人のような大きな顔は、家族を上陸さ

せる前の偵察にこの島に近づいた、一頭の巨大な牡の顔だったかも知れない。
漁師たちが肝を冷やして逃げ帰ったとき、始めて、この無名の島は「魔の島」と呼ばれた。だが、それはまだほんとうの名ではない。人間の欲望がこの島の上に加わるまでは、島はなお、無名の島である。

4

都万浦の漁師たちよりも早くから、そして彼らよりももっと明確に、この島の存在を知っている人たちがいた。それは、伯耆の米子灘の廻船問屋大谷氏の船の乗組員たちである。その船は鬱陵島への往還、いつもこの島の沖を通っていたのだった。
大谷氏が江戸幕府に申請して鬱陵島の拝領と渡海の許しを得たのは、都万浦の漁師たちが始めて「魔の島」を見たよりも二十年ばかり前の、元和四年（一六一八年）だったが、彼らが実際に鬱陵島へ渡航しはじめたのは、それよりも更に五十年あまり前の永禄年間だった。
米子灘を出た大谷氏の船の最後の寄港地は、隠岐の島後の福浦だった。福浦から鬱陵島までは百四十浬。その長い航路の途中に、この島はあった。この島のほかには、一つの島もなかった。この島が見えて来れば、航程の半ばを過ぎたしるしだった。そしてこの島をうしろに船を西北へ進めて行けば、やがて鬱陵島が見えて来るのだった。
つまりこの島は、大谷氏の鬱陵島航路の、いわば航海標識だったのである。そして、ただそれだけのことだったのだ。大谷氏の船は、岩礁を遠く避けてこの島の沖を素通りして行くだけだった。このようにして島は、やはり無名の島だったのである。

5

都万浦の漁師たちがこの島を「魔の島」と呼んでから二十年あまり後の、明暦二年（一六五六年）、三代目大谷九右衛門は、初代大谷氏の鬱陵島と同様、この島の拝領を江戸幕府へ願い出た。年々、海驢の数がこの島に多くなってくるのを見たからである。

海驢がこの島にいることは、大谷氏の船の乗組員たちは当然、都万浦の漁師たちよりも早くから知っていた。また、その数が近年俄かに殖えてきた理由も、知っていたはずである。海驢は鬱陵島を追われてこの島へやって来るのだった。追ったのはほかでもない、彼らだったのである。

彼らは鬱陵島を竹島あるいは磯竹島と呼んでいた。鬱陵または蔚陵は朝鮮名である。

朝鮮では、高麗の末頃から鬱陵への植民を始めたが、その後次第に犯罪者や流浪人の逃入する者が多くなり、やがてその一味は日本の海賊船と組んで、ここを根拠にして朝鮮半島の沿岸を脅やかすようになった。そのため、十五世紀の始め、李王太宗は按撫使を遣って島民の本土帰還を促し、この島を空島化することを謀った。この方針は世宗・成宗の代にも継がれて、しばしば島民の刷還がくりかえされているうちに、代って日本人のこの島への渡航者が殖えていったのである。

初代の大谷氏がこの島へ渡りだしたのも、その頃であった。日本人の多くは、海賊の一味か蒙昧な漁民かだった。だが、大谷氏はちがった。彼は智恵ある商人だった。

島には、黒檀・白檀・桐・巨竹などが繁っており、海驢が群棲し、鮑（あわび）・海胆（うに）・海藻などの産物も豊富だった。それらの特産物を大谷氏は、将軍家をはじめ老中・年寄から末僚に至るまで手厚

く献上し、金子や絹布も惜しみなく添えて、この島の拝領並びに渡海御免書の下附を願い出た。幕府は既に切支丹禁令を出しており、それとともに海外渡航に眼を光らせていることを知っていた大谷氏は、越後へ廻漕しての帰途たまたま突風に遭ってこの島に漂着したと言い、調べてみると物産の豊かな島であって、これが空しく放棄されていることは天下国家のためにもまことに惜しむべきことだと申し出たのであった。最初に願い出てから三年、彼は目的を遂げるために惜しみなく金品を注ぎこんで漸く渡海御免の奉書を手にした。勿論そのあいだにも彼は渡航をつづけ、御免書を得た際の準備を着々とこの島の上に進めていたのである。

大谷氏の目的は勿論この島の利益の独占にあった。だが、他の者を悉く退去させて一切を自分の手でやろうというのではない。却って、そのまま彼らを利用しようというのが、彼の狙いだった。この狙いは、そのための事前の懐柔策と、幕府の威令とによって達せられた。御免書を持たぬ者は、大谷氏の傭人となること以外には、この島へ渡ることもこの島で働くこともできないわけだった。

彼らの殆どは大谷氏の傭人となって、それぞれ従前どおりの仕事、――木材の伐採、海驢の捕獲、その皮革や油などの採製、鮑取りや海藻取りなどに従い、海賊くずれや無能の無頼者たちはまたそれなりに、外からの侵入者や内の不平者に対して大谷氏の権益を守る役目をした。この新しい傭人たちはただ、めいめいの分担に従っておりさえすればよかった。これまでのように、獲物を持ち帰って自ら売りさばく手間もいらず、休漁期にも、大谷氏の廻船に乗組めば、とにかく食っていくだけのことはできた。彼らは新たに彼らの利益の独占者となったこの大谷氏を、却って徳とした。無頼者たちもその従順な配下となった。

こうして大谷氏は竹島の漁業・林業を独占し、事業は順調に進んで年々莫大な利益をあげた。幕府へは絶えず金品を献上して、代々、将軍にお目見えを賜わるほどの、いまは顕然たる豪商であった。

こういう大谷氏にとって、竹島への航海標識にすぎない小さな裸島の海驢などは、始めは問題ではなかった。しかし、この島が他の者の漁場になることは、問題である。海驢が多く集って来るようになったことによって、多分にその恐れはあった。三代目大谷九右衛門がこの小さな裸島の拝領を江戸幕府へ願い出たのは、そのためである。

竹島からの帰途、九右衛門は小舟を下して自らこの島を調査した。東西両島の、水道を挟んでいる側の岸にはわずかに舟をつけ得る場所のあること、いくつもの洞窟があり石浜もあって海驢の繁殖地としては恰好の地形であること、周辺の岩礁と岩礁とのあいだには、鮑・栄螺・海鼠・海胆等が蝟集しており、いわのり・わかめ・てんぐさ等の海藻類も豊富であることがわかった。直ちにこの島を漁場とするかどうかは別として、とにかく独占しておこう。そう考えて三代目九右衛門は拝領の願いを出すことに決めた。

島はこのとき始めて、その磯の上に人間の足跡を印されたのである。しかしなお、この島は無名の島だった。大谷氏の拝領願に記されたこの島の名は、「竹島之道筋草木無御座岩島」であった。

6

この、竹島の道筋の草木御座無き岩島は、大谷氏の拝領後もしばらくのあいだは、殆どもとど

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com